

特40

150

古文讀本  
六の巻

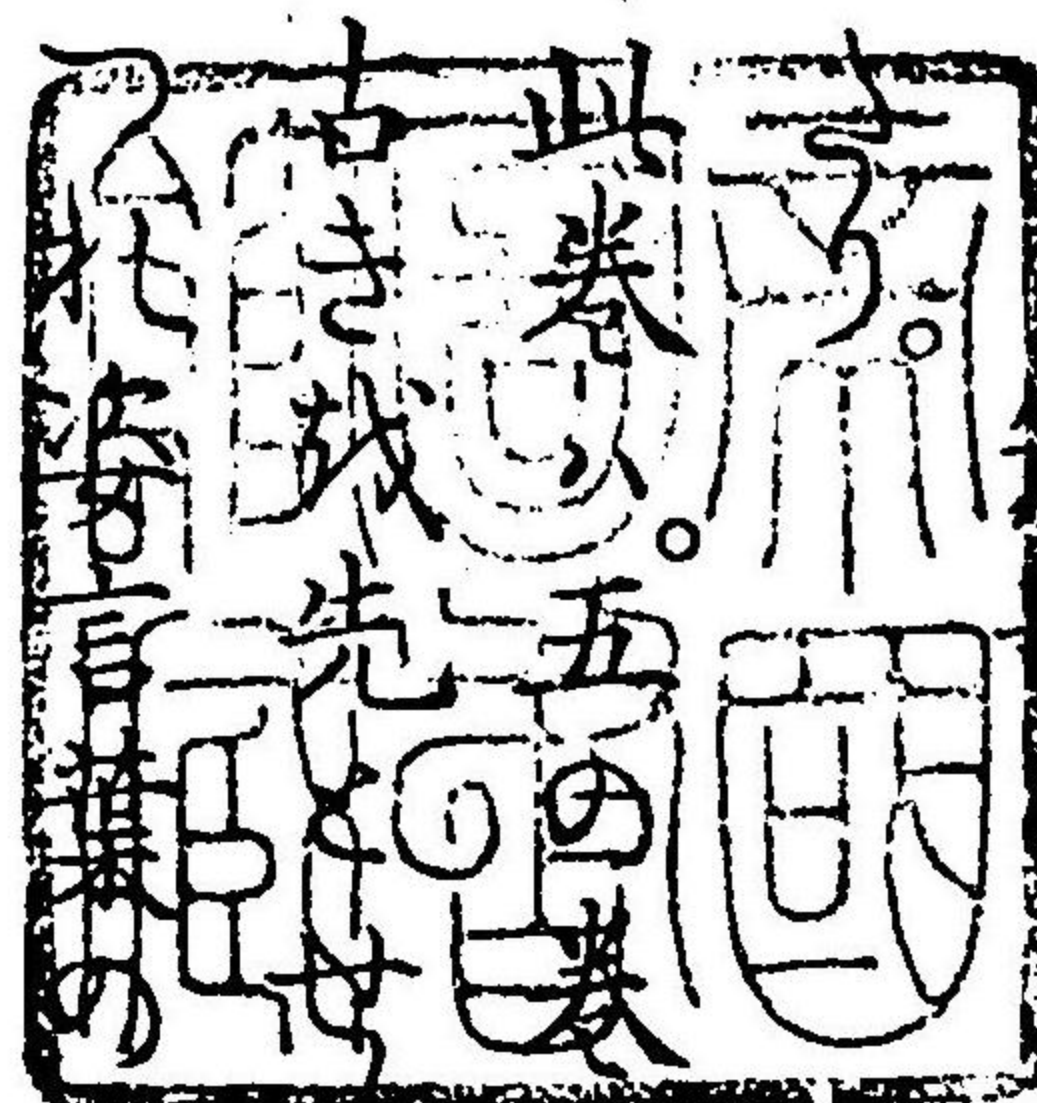
前がき

此卷ハ歌よみ習ひ。誦し習はしめんため此讀本  
あり。短歌ハ六とに姿と調と先もひこして撰び  
しり。

此卷ハ五の卷以上の如く近き先とせびして。  
古き先とせり。その故ハ散文ハ時代の下るに  
つれ姿言葉の沿革ありて。漸次に吾と親しく  
つり來る事ちれば。まづ親しきより始むべきわ  
けハ。一の卷の前がきにいつるが如し。然るに歌  
ハ。心こまやりに姿花やりにちまるとる進歩ころあ

前がき

此卷ハ歌よみ習ひ誦し習はしめんためは讀本  
あり。短歌ハ其とに姿と調と錢むよごとて撰び



以上の如く近き哉先こせぐて。  
古き哉先とせぐ。その故ハ散文ハ時代の下るに  
沿革ありて。漸次に吾と親しく

つり來る事るハまづ親しきより始むべきわ  
けハ。一の卷の前がきにいつるが如し。然るに歌  
ハ心こまやりに姿花やりにちまるる進歩らうあ



概していゝを散文の如くいちぢくき沿筆  
ちく。たゞに長歌小至りてハ。萬葉集以後ふつ  
びふるハぬ勢となりてたまきバ。材料の採り用  
ふるに足るものなく。なほ古きより始めん事順  
序もよく。素質より彩色ふうつる道ちる。げけき  
むちり。

材料を萬葉集と八代集とに採りたるハ。その時  
代々々の姿を見るにハ。たきとまづ此書による  
事にて。歌人の本書とたつるものちるハ。但  
古今に萬葉作者の歌も入り。後撰以下に古今

作者のも入りたまきバ。時代の姿ちるハ。と難ずる  
人もあるべし。それハ作者こそむし。ちるハ。  
歌の姿ハその時代にあへるをえらぶるちるバ。  
妨なれりぬ。

題をちるさぬハ。前の歌と同トきちり。名をちる  
さぬハ。前の作者と同トきちり。

作者の名ハ本書のまにちる。二度よりのちハ  
ちる。官姓等をはぶく。されバよみ人ちる。ず  
の書方ハ前巻と。ことちるなり。

作者の小傳ちる。きハ。ちる。有名ちる。ぬ人。および

その詳なるぬ人々あり。

大望ハ御傳をのせび。大臣ハ父の名をのせず。小傳のうち父の名をあげたるは。その歌人なるまゝか。まさハ名高うり人らにうぎる。

没年の知られたる人ハこれを忘る。然らぬもその時代をしるす。されど詞書に年号などの見えたらと。二重をさけたるもあり。官ハ世人の常によぶめの又ハ晩年のを忘るす。これも名の上ふすでにあるをばうらひてせず。

勅撰ハ勅に應じて奏上せるものなり。詞書も

すべて敬語を用ひたり。のち此詞書を手本にしてあけるもの。常に敬語を普通の詞づらひと心得たる。近古の文ふハゆる誤用おかくありをきこり。今ハわさくにしてすべて此敬語をばぶく。

明治廿二年十月 選者 一 〇 〇 〇

古文讀本六の巻

大和田建樹選



孝謙天皇の在時。橘諸兄等の撰び集められたる  
 もとに、及び大伴家持卿の續撰を。加へたる  
 ことあり。長歌の盛ちりたる時代の。この書  
 おろて外なる。加茂の御歌  
 意考より。萬葉集の。の  
 の後代に。の



天皇の御名を尊と云ふは  
天皇の御名を尊と云ふは  
天皇の御名を尊と云ふは  
天皇の御名を尊と云ふは  
天皇の御名を尊と云ふは

反

天皇の御名を尊と云ふは  
天皇の御名を尊と云ふは  
天皇の御名を尊と云ふは  
天皇の御名を尊と云ふは  
天皇の御名を尊と云ふは

天皇の御名を尊と云ふは  
天皇の御名を尊と云ふは  
天皇の御名を尊と云ふは  
天皇の御名を尊と云ふは  
天皇の御名を尊と云ふは

華言聖言の時作歌

天皇の御名を尊と云ふは  
天皇の御名を尊と云ふは  
天皇の御名を尊と云ふは  
天皇の御名を尊と云ふは  
天皇の御名を尊と云ふは



あはれみよ	あはれみよ
あはれみよ	あはれみよ
あはれみよ	あはれみよ
あはれみよ	あはれみよ
あはれみよ	あはれみよ
あはれみよ	あはれみよ
あはれみよ	あはれみよ
あはれみよ	あはれみよ
あはれみよ	あはれみよ
あはれみよ	あはれみよ
あはれみよ	あはれみよ

藤原宮役民作歌

いとまじり詞

いとまじり詞

いとまじり詞

反歌

いとまじり詞	いとまじり詞
いとまじり詞	いとまじり詞
いとまじり詞	いとまじり詞
いとまじり詞	いとまじり詞
いとまじり詞	いとまじり詞
いとまじり詞	いとまじり詞
いとまじり詞	いとまじり詞
いとまじり詞	いとまじり詞
いとまじり詞	いとまじり詞
いとまじり詞	いとまじり詞
いとまじり詞	いとまじり詞

あはれをいふはなほ	あはれをいふはなほ
あはれをいふはなほ	あはれをいふはなほ
あはれをいふはなほ	あはれをいふはなほ
あはれをいふはなほ	あはれをいふはなほ
あはれをいふはなほ	あはれをいふはなほ
あはれをいふはなほ	あはれをいふはなほ
あはれをいふはなほ	あはれをいふはなほ
あはれをいふはなほ	あはれをいふはなほ
あはれをいふはなほ	あはれをいふはなほ
あはれをいふはなほ	あはれをいふはなほ

あはれをいふはなほ  
あはれをいふはなほ  
あはれをいふはなほ  
あはれをいふはなほ

いとせむし

藤原宮御井歌

あはれをいふはなほ	あはれをいふはなほ
あはれをいふはなほ	あはれをいふはなほ
あはれをいふはなほ	あはれをいふはなほ
あはれをいふはなほ	あはれをいふはなほ
あはれをいふはなほ	あはれをいふはなほ
あはれをいふはなほ	あはれをいふはなほ
あはれをいふはなほ	あはれをいふはなほ
あはれをいふはなほ	あはれをいふはなほ
あはれをいふはなほ	あはれをいふはなほ
あはれをいふはなほ	あはれをいふはなほ
あはれをいふはなほ	あはれをいふはなほ

あはれ	あはれ
あはれ	あはれ
あはれ	あはれ
あはれ	あはれ
あはれ	あはれ
あはれ	あはれ
あはれ	あはれ
あはれ	あはれ
あはれ	あはれ
あはれ	あはれ

天皇  
天武天皇

天皇崩之時法作歌

あはれ

持統天皇

あはれ

あはれ	あはれ
あはれ	あはれ
あはれ	あはれ
あはれ	あはれ
あはれ	あはれ
あはれ	あはれ
あはれ	あはれ
あはれ	あはれ
あはれ	あはれ
あはれ	あはれ

あはれ  
枕詞

讚岐狭谷島視石中死人作歌

人磨



た

か

靈龜元年秋九月志貴親王薨時作歌

た

か

か

か

か

た

か

か

か

た  
か  
か

か  
か  
か

短歌

た  
か  
か  
か

其國子 其國子 其國子

詠不盡出歌

其國子	其國子	其國子
其國子	其國子	其國子
其國子	其國子	其國子
其國子	其國子	其國子
其國子	其國子	其國子
其國子	其國子	其國子
其國子	其國子	其國子
其國子	其國子	其國子
其國子	其國子	其國子
其國子	其國子	其國子

其國子	其國子	其國子
其國子	其國子	其國子
其國子	其國子	其國子
其國子	其國子	其國子
其國子	其國子	其國子
其國子	其國子	其國子
其國子	其國子	其國子
其國子	其國子	其國子
其國子	其國子	其國子
其國子	其國子	其國子
其國子	其國子	其國子

其國子

其國子	其國子
其國子	其國子
其國子	其國子
其國子	其國子
其國子	其國子
其國子	其國子
其國子	其國子
其國子	其國子
其國子	其國子
其國子	其國子
其國子	其國子

あつたふんば　　ふらふら　　いこまふら　　詞

登神岳作歌

山部宿禰赤人

神龜元年より天平八年までの歌の集り  
に。

いさむらひの山に　　あそびて　　あそびて　　あそびて  
あそびて　　あそびて　　あそびて　　あそびて  
あそびて　　あそびて　　あそびて　　あそびて

あそびて　　あそびて　　あそびて　　あそびて  
あそびて　　あそびて　　あそびて　　あそびて  
あそびて　　あそびて　　あそびて　　あそびて  
あそびて　　あそびて　　あそびて　　あそびて

夏歌

あそびて　　あそびて　　あそびて　　あそびて  
あそびて　　あそびて　　あそびて　　あそびて  
あそびて　　あそびて　　あそびて　　あそびて  
あそびて　　あそびて　　あそびて　　あそびて

中島　　あそびて　　大木にあそぶ

あそびて　　松詞

羈旅歌

蒙古源流  
 卷之四  
 羈旅歌  
 一  
 二  
 三  
 四  
 五  
 六  
 七  
 八  
 九  
 十  
 十一  
 十二  
 十三  
 十四  
 十五  
 十六  
 十七  
 十八  
 十九  
 二十  
 二十一  
 二十二  
 二十三  
 二十四  
 二十五  
 二十六  
 二十七  
 二十八  
 二十九  
 三十  
 三十一  
 三十二  
 三十三  
 三十四  
 三十五  
 三十六  
 三十七  
 三十八  
 三十九  
 四十  
 四十一  
 四十二  
 四十三  
 四十四  
 四十五  
 四十六  
 四十七  
 四十八  
 四十九  
 五十  
 五十一  
 五十二  
 五十三  
 五十四  
 五十五  
 五十六  
 五十七  
 五十八  
 五十九  
 六十  
 六十一  
 六十二  
 六十三  
 六十四  
 六十五  
 六十六  
 六十七  
 六十八  
 六十九  
 七十  
 七十一  
 七十二  
 七十三  
 七十四  
 七十五  
 七十六  
 七十七  
 七十八  
 七十九  
 八十  
 八十一  
 八十二  
 八十三  
 八十四  
 八十五  
 八十六  
 八十七  
 八十八  
 八十九  
 九十  
 九十一  
 九十二  
 九十三  
 九十四  
 九十五  
 九十六  
 九十七  
 九十八  
 九十九  
 一百

反歌

一  
 二  
 三  
 四  
 五  
 六  
 七  
 八  
 九  
 十  
 十一  
 十二  
 十三  
 十四  
 十五  
 十六  
 十七  
 十八  
 十九  
 二十  
 二十一  
 二十二  
 二十三  
 二十四  
 二十五  
 二十六  
 二十七  
 二十八  
 二十九  
 三十  
 三十一  
 三十二  
 三十三  
 三十四  
 三十五  
 三十六  
 三十七  
 三十八  
 三十九  
 四十  
 四十一  
 四十二  
 四十三  
 四十四  
 四十五  
 四十六  
 四十七  
 四十八  
 四十九  
 五十  
 五十一  
 五十二  
 五十三  
 五十四  
 五十五  
 五十六  
 五十七  
 五十八  
 五十九  
 六十  
 六十一  
 六十二  
 六十三  
 六十四  
 六十五  
 六十六  
 六十七  
 六十八  
 六十九  
 七十  
 七十一  
 七十二  
 七十三  
 七十四  
 七十五  
 七十六  
 七十七  
 七十八  
 七十九  
 八十  
 八十一  
 八十二  
 八十三  
 八十四  
 八十五  
 八十六  
 八十七  
 八十八  
 八十九  
 九十  
 九十一  
 九十二  
 九十三  
 九十四  
 九十五  
 九十六  
 九十七  
 九十八  
 九十九  
 一百



石田王萃之晴作歌

丹生女用

たゆむとさくらをよみて	たれもなき大いなる
なまなまはなをよみて	たれもなきとてよみて
もよほさくはなをよみて	もよほさくはなをよみて
たゆむとさくらをよみて	たれもなき大いなる
なまなまはなをよみて	たれもなきとてよみて
もよほさくはなをよみて	もよほさくはなをよみて
たゆむとさくらをよみて	たれもなき大いなる
なまなまはなをよみて	たれもなきとてよみて
もよほさくはなをよみて	もよほさくはなをよみて

たゆむとさくらをよみて	たれもなき大いなる
なまなまはなをよみて	たれもなきとてよみて
もよほさくはなをよみて	もよほさくはなをよみて
たゆむとさくらをよみて	たれもなき大いなる
なまなまはなをよみて	たれもなきとてよみて
もよほさくはなをよみて	もよほさくはなをよみて

反歌

たゆむとさくらをよみて	たれもなき大いなる
なまなまはなをよみて	たれもなきとてよみて
もよほさくはなをよみて	もよほさくはなをよみて
たゆむとさくらをよみて	たれもなき大いなる
なまなまはなをよみて	たれもなきとてよみて
もよほさくはなをよみて	もよほさくはなをよみて

松詞

使の松詞

の事を用ひし使

夕

石う

石う

石う

松詞

使の松詞

の事を用ひし使

夕

石う

石う

石う

好去好来歌

時節かたし  
か  
か

僧正遍昭

在俗の時と良峰、宗貞と。左近将少将

たしし人ちり。寛平二年寂す。

松詞

使の松詞

の事を用ひし使

夕

石う

石う

菅原  
伏見  
大和

松詞

左大臣の家にて。此れ歌をけりて歌よ  
る。藤原忠國  
神  
亭子院のまじりてかたむねの  
私徽殿のまじりてかたむね

伊勢

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

題

赤人

赤人 我大君の  
 猶之世の大海の  
 赤人 我大君の  
 猶之世の大海の  
 赤人 我大君の  
 猶之世の大海の  
 赤人 我大君の  
 猶之世の大海の

及歌

給見世 播磨  
 給見世 播磨  
 給見世 播磨  
 給見世 播磨

給見世 播磨

賜酒節度使卿等御歌

聖武天皇

賜酒節度使卿等御歌  
 聖武天皇

たすくは我の心は  
たすくは我の心は  
たすくは我の心は  
たすくは我の心は  
たすくは我の心は  
たすくは我の心は  
たすくは我の心は  
たすくは我の心は  
たすくは我の心は  
たすくは我の心は

及歌

たすくは我の心は  
たすくは我の心は  
たすくは我の心は  
たすくは我の心は  
たすくは我の心は  
たすくは我の心は  
たすくは我の心は  
たすくは我の心は  
たすくは我の心は  
たすくは我の心は

國々の府廳太宰府の歌をすづく  
す

悲寧樂故京郷作歌

たすくは我の心は  
たすくは我の心は  
たすくは我の心は  
たすくは我の心は  
たすくは我の心は  
たすくは我の心は  
たすくは我の心は  
たすくは我の心は  
たすくは我の心は  
たすくは我の心は

樂府詩集卷之六十四  
 古詩十九首  
 行行且復遠  
 行行且復遠  
 行行且復遠  
 行行且復遠  
 行行且復遠  
 行行且復遠  
 行行且復遠  
 行行且復遠  
 行行且復遠  
 行行且復遠

反歌

行行且復遠  
 行行且復遠  
 行行且復遠  
 行行且復遠  
 行行且復遠  
 行行且復遠  
 行行且復遠  
 行行且復遠  
 行行且復遠  
 行行且復遠



難波宮作歌

あはれなる御心	あはれなる御心
あはれなる御心	あはれなる御心
あはれなる御心	あはれなる御心
あはれなる御心	あはれなる御心
あはれなる御心	あはれなる御心
あはれなる御心	あはれなる御心
あはれなる御心	あはれなる御心
あはれなる御心	あはれなる御心
あはれなる御心	あはれなる御心
あはれなる御心	あはれなる御心

反歌

あはれなる御心  
あはれなる御心  
あはれなる御心  
あはれなる御心  
あはれなる御心  
あはれなる御心  
あはれなる御心  
あはれなる御心  
あはれなる御心  
あはれなる御心

松詞

春三月諸卿大夫等下難波時歌



白雲のたふしに	流るる水
春雨のたふしに	流るる水
秋風のたふしに	流るる水
冬雪のたふしに	流るる水

五歌

たつたき	風の神
たつたき	風の神

たつたき	風の神
たつたき	風の神

登筑波山歌

筑波嶺	筑波嶺
筑波嶺	筑波嶺
筑波嶺	筑波嶺
筑波嶺	筑波嶺

古今詩林

古今詩林  
六卷

天竺の  
天竺の

挽歌

葛井連子老

天竺の  
天竺の  
天竺の  
天竺の  
天竺の  
天竺の  
天竺の  
天竺の

出づ  
出づ  
出づ  
出づ  
出づ  
出づ  
出づ  
出づ

及歌  
及歌  
及歌  
及歌  
及歌  
及歌  
及歌  
及歌

古今詩林 卷之六

あはれさ たちちの 共に枕詞

哀傷長逝之弟歌

大伴宿祢家持

大納言旅人の子にへ中納言たり。延暦四年薨す。

あはれさ たちちの 共に枕詞  
あはれさ たちちの 共に枕詞  
あはれさ たちちの 共に枕詞  
あはれさ たちちの 共に枕詞

あはれさ たちちの 共に枕詞  
あはれさ たちちの 共に枕詞  
あはれさ たちちの 共に枕詞  
あはれさ たちちの 共に枕詞  
あはれさ たちちの 共に枕詞  
あはれさ たちちの 共に枕詞  
あはれさ たちちの 共に枕詞  
あはれさ たちちの 共に枕詞  
あはれさ たちちの 共に枕詞  
あはれさ たちちの 共に枕詞

反 韻

天の雲は白く霞は白く  
 雲は白く霞は白く  
 霞は白く雲は白く  
 雲は白く霞は白く

花 道

花の道は 花の道は 花の道は  
 花の道は 花の道は 花の道は

花 道

天の雲は白く霞は白く	花の道は 花の道は 花の道は
雲は白く霞は白く	花の道は 花の道は 花の道は
霞は白く雲は白く	花の道は 花の道は 花の道は
雲は白く霞は白く	花の道は 花の道は 花の道は
霞は白く雲は白く	花の道は 花の道は 花の道は
雲は白く霞は白く	花の道は 花の道は 花の道は
霞は白く雲は白く	花の道は 花の道は 花の道は
雲は白く霞は白く	花の道は 花の道は 花の道は
霞は白く雲は白く	花の道は 花の道は 花の道は
雲は白く霞は白く	花の道は 花の道は 花の道は
霞は白く雲は白く	花の道は 花の道は 花の道は

反歌

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

敬和立山賦

大伴宿称池主

家持越中守の時の下はとて越中の様  
た〜入る。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

くまのこころをいかに  
くまのこころをいかに  
川

及歌

くまのこころをいかに  
くまのこころをいかに  
くまのこころをいかに

くまのこころをいかに

賀陸奥國出金詔書歌

家持

芳系の瑞穂の國を  
天のついでに  
ついでに  
ついでに  
ついでに  
ついでに  
ついでに  
ついでに  
ついでに  
ついでに

いかにあはれに思ふに  
あはれに思ふに  
あはれに思ふに  
あはれに思ふに  
あはれに思ふに  
あはれに思ふに  
あはれに思ふに  
あはれに思ふに  
あはれに思ふに  
あはれに思ふに

あはれに思ふに  
あはれに思ふに  
あはれに思ふに  
あはれに思ふに  
あはれに思ふに  
あはれに思ふに  
あはれに思ふに  
あはれに思ふに  
あはれに思ふに  
あはれに思ふに

いかにあはれに思ふに  
あはれに思ふに  
あはれに思ふに  
あはれに思ふに  
あはれに思ふに  
あはれに思ふに  
あはれに思ふに  
あはれに思ふに  
あはれに思ふに  
あはれに思ふに

あはれに思ふに  
あはれに思ふに  
あはれに思ふに  
あはれに思ふに  
あはれに思ふに  
あはれに思ふに  
あはれに思ふに  
あはれに思ふに  
あはれに思ふに  
あはれに思ふに

大勢のたもとにまはるる

反歌

あはれなる心はあはれなる

あはれなる心はあはれなる

あはれなる心はあはれなる

あはれなる心はあはれなる

あはれなる心はあはれなる

あはれなる心はあはれなる

花詞

橘歌

あはれなる心はあはれなる

あはれなる心はあはれなる

あはれなる心はあはれなる

あはれなる心はあはれなる

あはれなる心はあはれなる

あはれなる心はあはれなる

あはれなる心はあはれなる

あはれなる心はあはれなる

あはれなる心はあはれなる

あはれなる心はあはれなる

あはれなる心はあはれなる

あはれなる心はあはれなる

あはれなる心はあはれなる

あはれなる心はあはれなる



あはれなる心はなほ  
あはれなる心はなほ  
あはれなる心はなほ  
あはれなる心はなほ  
あはれなる心はなほ  
あはれなる心はなほ  
あはれなる心はなほ  
あはれなる心はなほ  
あはれなる心はなほ  
あはれなる心はなほ

及歌

あはれなる心はなほ  
あはれなる心はなほ  
あはれなる心はなほ  
あはれなる心はなほ  
あはれなる心はなほ  
あはれなる心はなほ  
あはれなる心はなほ  
あはれなる心はなほ  
あはれなる心はなほ  
あはれなる心はなほ

あはれなる心はなほ  
あはれなる心はなほ  
あはれなる心はなほ  
あはれなる心はなほ  
あはれなる心はなほ  
あはれなる心はなほ  
あはれなる心はなほ  
あはれなる心はなほ  
あはれなる心はなほ  
あはれなる心はなほ

天平感寶元年閏五月六日以來起小旱百姓田畝  
稍有凋色也至于六月朔日忽見雨雲氣仍  
作雲歌

あはれなる心はなほ  
あはれなる心はなほ  
あはれなる心はなほ  
あはれなる心はなほ  
あはれなる心はなほ  
あはれなる心はなほ  
あはれなる心はなほ  
あはれなる心はなほ  
あはれなる心はなほ  
あはれなる心はなほ

にーよるんま  
 しーたのそをさ  
 うそはそそそ  
 天つ水あそそ  
 けーゆる天つ水  
 せそそそそそ  
 及歌  
 此そそそそそ  
 せそそそそそ

よ ゆに同から歌

天つ水 松垣

向京路上依興預作侍宴應詔歌

せそそそそそ  
 せそそそそそ  
 せそそそそそ  
 せそそそそそ  
 せそそそそそ  
 せそそそそそ

天のふらふらとては  
 雲のたもとに  
 花のうらやまに  
 水のうらやまに  
 天のうらやまに  
 花のうらやまに  
 水のうらやまに  
 雲のうらやまに  
 花のうらやまに  
 水のうらやまに  
 雲のうらやまに

反歌

~~~~~  
 花のうらやまに  
 水のうらやまに

陳防人悲別之情歌

~~~~~  
 花のうらやまに  
 水のうらやまに  
 雲のうらやまに  
 花のうらやまに  
 水のうらやまに  
 雲のうらやまに

Main body of handwritten text on the right page, consisting of several lines of script.

Main body of handwritten text on the left page, consisting of several lines of script.

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

以上まゝの詞

### 喻族歌

### 家持

|           |           |
|-----------|-----------|
| 久方の天のまじたる | 高千穂の嶽のあかり |
| ~~~~~     | ~~~~~     |
| ~~~~~     | ~~~~~     |
| ~~~~~     | ~~~~~     |
| ~~~~~     | ~~~~~     |
| ~~~~~     | ~~~~~     |
| ~~~~~     | ~~~~~     |
| ~~~~~     | ~~~~~     |
| ~~~~~     | ~~~~~     |
| ~~~~~     | ~~~~~     |
| ~~~~~     | ~~~~~     |
| ~~~~~     | ~~~~~     |
| ~~~~~     | ~~~~~     |
| ~~~~~     | ~~~~~     |
| ~~~~~     | ~~~~~     |
| ~~~~~     | ~~~~~     |
| ~~~~~     | ~~~~~     |
| ~~~~~     | ~~~~~     |
| ~~~~~     | ~~~~~     |
| ~~~~~     | ~~~~~     |

|                                                                                                                                                    |                                                                                                                                              |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| あまのこゝろをしのひて<br>あまのこゝろをしのひて<br>あまのこゝろをしのひて<br>あまのこゝろをしのひて<br>あまのこゝろをしのひて<br>あまのこゝろをしのひて<br>あまのこゝろをしのひて<br>あまのこゝろをしのひて<br>あまのこゝろをしのひて<br>あまのこゝろをしのひて | 天のつとむ<br>あまのこゝろをしのひて<br>あまのこゝろをしのひて<br>あまのこゝろをしのひて<br>あまのこゝろをしのひて<br>あまのこゝろをしのひて<br>あまのこゝろをしのひて<br>あまのこゝろをしのひて<br>あまのこゝろをしのひて<br>あまのこゝろをしのひて |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

反歌

あまのこゝろをしのひて

あまのこゝろをしのひて  
あまのこゝろをしのひて  
あまのこゝろをしのひて  
あまのこゝろをしのひて  
あまのこゝろをしのひて  
あまのこゝろをしのひて  
あまのこゝろをしのひて  
あまのこゝろをしのひて  
あまのこゝろをしのひて  
あまのこゝろをしのひて

あまのこゝろをしのひて

古文讀本六の巻上終

古文讀本六の巻下

大和田建樹選

○古今和歌集

醍醐天皇の延喜年中。勅より成る。紀友則紀貫之。凡河内躬恒。壬生忠峯等の撰。順徳院の八雲法抄より。歌のたまをひるくろくろるえんに。古今第一なり。阿佛房口傳より。歌の本體より古今を見らるる本歌に。す。と。

春あけけり目もゆる 紀貫之

神はけりてはくりに水もさかすま

さかすまはくりに水もさかすま

題 水もさかすまはくりに水もさかすま

梅づえふはくりに水もさかすま

さかすまはくりに水もさかすま

實平の昔時。后の宮のすゝめのみ

源當純

谷風ふくりに水もさかすま

さかすまはくりに水もさかすま

源宗于朝臣

右京大夫たり。天慶二年卒す。

春あけけり目もゆる 紀貫之

神はけりてはくりに水もさかすま

題 水もさかすまはくりに水もさかすま

僧正遍昭の子にて。在俗の時ハ玄利也

いひ。左邊將監たり一人なり。

梅づえふはくりに水もさかすま

さかすまはくりに水もさかすま

水もさかすまはくりに水もさかすま



伊勢

伊勢守藤原経隆の女あり。宇多天皇より  
おぼせし皇子をうむるにさしこば。伊勢清  
ひの伊勢清息のひのを結せり。

春ふりこころにさしこばるる  
あはれしむらひの袖をぬき  
あはれしむらひの袖をぬき  
あはれしむらひの袖をぬき  
あはれしむらひの袖をぬき  
あはれしむらひの袖をぬき  
あはれしむらひの袖をぬき  
あはれしむらひの袖をぬき

あはれしむらひの袖をぬき  
あはれしむらひの袖をぬき  
あはれしむらひの袖をぬき  
あはれしむらひの袖をぬき  
あはれしむらひの袖をぬき  
あはれしむらひの袖をぬき  
あはれしむらひの袖をぬき  
あはれしむらひの袖をぬき

阿保親王の皇子。平城天皇の帝に孫して。左  
近衛中将たり。元慶四年卒す。母に在丑中将  
あり。

あはれしむらひの袖をぬき  
あはれしむらひの袖をぬき  
あはれしむらひの袖をぬき  
あはれしむらひの袖をぬき  
あはれしむらひの袖をぬき  
あはれしむらひの袖をぬき  
あはれしむらひの袖をぬき  
あはれしむらひの袖をぬき

水とてささるる  
題

春の白くさくさ

香ちり

かきくさくさ

かきくさくさ

清原深養父

肉藏頭たり。延喜の後時の人なり。

かきくさくさ

かきくさくさ

亭子院の歌合。春のさくさ

凡河内躬恒

延喜の時。厨子折頭たり。人なり。

かきくさくさ

かきくさくさ

かきくさくさ

紀利貞

彈正御たり。元慶五年卒。

かきくさくさ

かきくさくさ

夏と秋と

躬恒

夏と秋と

夏と秋と

夏と秋と

夏と秋と

躬恒

夏と秋と

夏と秋と

夏と秋と

夏と秋と

躬恒

夏と秋と

夏と秋と

夏と秋と

夏と秋と

夏と秋と

夏と秋と

大江千里

参議青人の子にて兵部大進たり。

一 夕月夜  
 一 小倉山  
 一 山城

兼光

一 延喜元年  
 一 康保二年

夕月夜

小倉山  
山城

あはれなる心はなほ  
あはれなる心はなほ

あはれなる心はなほ

貞徳の心はなほ  
徳原の心はなほ  
徳原の心はなほ  
藤原興風

藤原興風の心はなほ

あはれなる心はなほ  
あはれなる心はなほ

小野千代の心はなほ

母の心はなほ

あはれなる心はなほ

あはれなる心はなほ

あはれなる心はなほ

藤原兼輔朝臣

中納言の心はなほ。延平二年薨す。鴨川堤の邊に住す。

中納言の心はなほ。

あはれなる心はなほ

あはれなる心はなほ

紀友則の心はなほ

杖詞

加賀

忠峯

忠峯の山は、  
 雲霧の間に、  
 鳥の聲を、  
 聞くこと、  
 人の心を、  
 清くする、  
 こと、  
 誠なる、  
 徳の、  
 峰なり。

忠峯の山は、  
 雲霧の間に、  
 鳥の聲を、  
 聞くこと、  
 人の心を、  
 清くする、  
 こと、  
 誠なる、  
 徳の、  
 峰なり。

平家朝臣の御代に於ては、  
御代に於ては、御代に於ては、

御代に於ては、御代に於ては、

御代に於ては、御代に於ては、

業平朝臣

御代に於ては、御代に於ては、

御代に於ては、御代に於ては、

御代に於ては、御代に於ては、

御代に於ては、御代に於ては、

在原行平朝臣

業平朝臣の御代に於ては、

御代に於ては、御代に於ては、

御代に於ては、御代に於ては、

御代に於ては、御代に於ては、

御代に於ては、御代に於ては、

御代に於ては、御代に於ては、

業平朝臣

御代に於ては、御代に於ては、

御代に於ては、御代に於ては、

○後撰和歌集

村上天皇の天曆年中。勅によりて成る。大  
中臣能宣。清原元輔。源順。紀時。文坂。上望城  
等の禁中梨壺といふ處にあつまりて撰  
ぶるなり。故にこれ人を梨壺の五人と  
いふ。鴨長明が無名抄にいそく後撰よる。  
よきし歌古今にとりてしきりて後い

久  
松  
詞

くほがみこぢりりれを歌えのしこ  
姿をばえそぢりり心きしちりり  
阿佛房口傳にいほく。後撰にそちりり  
歌多く。又みぢりりがよき歌とちりり  
ぢりりたり。梨壺の五人のちりりけりり  
延喜の時。ちりりちりりちりり

貫之

春ぢりりたぢりりちりりちりり  
月ぢりりちりりちりりちりり  
夕ぢりりちりりちりりちりり



源信明

公忠節に於て陸奥守たり。康保二  
年卒す。

源信明の御製  
源信明の御製  
源信明の御製  
源信明の御製  
源信明の御製  
源信明の御製  
源信明の御製  
源信明の御製  
源信明の御製  
源信明の御製

源信明の御製

源信明の御製  
源信明の御製  
源信明の御製  
源信明の御製  
源信明の御製  
源信明の御製  
源信明の御製  
源信明の御製  
源信明の御製  
源信明の御製

道江の更衣

醍醐天皇に於て。時明親王を以て外  
内親王とす。其の御製あり。

源信明の御製  
源信明の御製  
源信明の御製  
源信明の御製  
源信明の御製  
源信明の御製  
源信明の御製  
源信明の御製  
源信明の御製  
源信明の御製

延喜の御製

醍醐天皇より。

御衣の御用ひに御用ひの御衣

袖に御用ひの御衣

類に御用ひの御衣

御用ひの御衣に御用ひの御衣

御用ひの御衣に御用ひの御衣

御用ひの御衣に御用ひの御衣

御用ひの御衣に御用ひの御衣

御用ひの御衣に御用ひの御衣

御用ひの御衣に御用ひの御衣

山越 井川

行平朝臣 行平朝臣

御用ひの御衣に御用ひの御衣

御用ひの御衣に御用ひの御衣

御用ひの御衣に御用ひの御衣

御用ひの御衣に御用ひの御衣

御用ひの御衣に御用ひの御衣

御用ひの御衣に御用ひの御衣

御用ひの御衣に御用ひの御衣

源公忠朝臣

あまのこ  
熱河

右大弁たり。天慶天曆の頃の人なり。ま  
後井の舟をよぶ。

あまのこはあまのこはあまのこ

あまのこはあまのこはあまのこ

わ

小野好古朝臣

天慶三年純友の乱。追捕凶賊使となり  
てあまたの人なり。大宰大貳たりは野  
大貳なりはあまのこはあまのこ

あまのこはあまのこはあまのこ

あまのこはあまのこはあまのこ

山ノ憶良

筑前守たり。天平五年薨す。

あまのこはあまのこはあまのこ

あまのこはあまのこはあまのこ

あまのこはあまのこはあまのこ

あまのこはあまのこはあまのこ

あまのこはあまのこはあまのこ

あまのこはあまのこはあまのこ

あまのこはあまのこはあまのこ





延喜の時。月次の屏風

貫之

あふらひの清水に

あふらひの清水に

いよやらららん望月乃こま

屏風に。八月十五夜池ある家よ。人あそび

したる所

源 順

能登守あり。永観元年卒。和名類聚

鈔の撰あり。

水けちぬふさの月さへいさのさよれを

さよれをいさのさよれをいさのさよれを

藤原為頼  
前白頼忠

藤原為頼  
題をよめりける

太皇太后宮大進。長徳の頃の人なり。

あふらひの清水に

いよやらららん望月乃こま

三條の店のおまをいさのさよれをいさのさよれを

清原 元輔

深養父の孫にて肥後守たり。永祚二年

卒す。

あふらひの清水に

百首和歌の中は 源重之

相模権守たり。長保二年陸奥の國にて卒す。

あゝのきよ下りてきこへしはなはた  
いかにとほりてはなはたきこへしはなはた  
あゝのきよ下りてきこへしはなはた  
いかにとほりてはなはたきこへしはなはた  
あゝのきよ下りてきこへしはなはた  
いかにとほりてはなはたきこへしはなはた

肥後守にて清原え輔をけりけるに源満仲  
せんぞにわたりてはなはたきこへしはなはた

え 輔

源満仲朝臣  
源満仲朝臣

鎮守府將軍經基の子にて。まゝの國に  
父の官に昇れり。長徳三年卒。其家を  
多田と号す。

あゝのきよ下りてきこへしはなはた  
いかにとほりてはなはたきこへしはなはた





花山  
山城

源公忠朝信

天祿四年五月廿一日圓融院の御成  
御成  
源公忠朝信

天祿四年五月廿一日圓融院の御成  
渡らせ  
大正

宇多天皇の皇子。中務卿敦慶親王の御成。

宇多天皇の皇子。中務卿敦慶親王の御成。  
源公忠朝信

く

貫之

まにむくみお水ふやせけるかろづか  
あつものなまひつゆきさきさき

○後拾遺和歌集

白河天皇の應徳年中。勅によりて成る。藤原  
の通後の撰ちり。阿佛房口傳りいそく。後  
拾遺まゝ。歌よこもほくこゑしたる頃ちれ

を。まゝ。く。み。お。水。ふ。や。せ。け。る。か。ろ。づ。か。  
あ。つ。も。の。な。ま。ひ。つ。ゆ。き。さ。き。さ。き。  
ま。に。む。く。み。お。水。ふ。や。せ。け。る。か。ろ。づ。か。  
あ。つ。も。の。な。ま。ひ。つ。ゆ。き。さ。き。さ。き。  
に。い。ひ。つ。も。ほ。く。こ。ゑ。し。た。る。頃。ち。れ

能因法師

在俗の時と橋、永愷といふ。ある説に長  
久元年寂せりといふ。

まにむくみお水ふやせけるかろづか  
あつものなまひつゆきさきさき  
長閑寺にすける頃。まにむくみお水ふやせけるかろづか

上東門院の中將

左京大夫道雅の如く。上東門院の官女也。

あまのついでにやまのこゝろにたはらふ

あまのついでにやまのこゝろにたはらふ

題 重之

まろのついでにやまのこゝろにたはらふ

まろのついでにやまのこゝろにたはらふ

永業四年。内裏のついでにたはらふ

伊勢大輔

伊勢祭主大中は輔叔の女にて。上東門院の

玉江  
掾津

官女也。

あまのついでにやまのこゝろにたはらふ

あまのついでにやまのこゝろにたはらふ

大井のついでにやまのこゝろにたはらふ  
中納言定頼

大納言の任の子にて。寛徳二年卒す。

あまのついでにやまのこゝろにたはらふ

あまのついでにやまのこゝろにたはらふ

あまのついでにやまのこゝろにたはらふ

源頼実

あまのついでにやまのこゝろにたはらふ

源道濟の御書  
源道濟

源信明の孫少子。伊勢守太宰少貳たり。  
實仁三年卒す。

おれは源信明の御書なりと云ふ

源道濟の御書  
快實法師

は源道濟の御書なりと云ふ

源道濟の御書

二條院に御書にける時平の陣

法賀  
源道濟

の御書なりと云ふ 大江嘉言

おれは源道濟の御書なりと云ふ

源道濟の御書

承暦二年。内裏の御書に云ふ

民部卿經信

中納言通方の御書にて大納言なり。

おれは源道濟の御書なりと云ふ

源道濟の御書

源道濟の御書に云ふ

源道濟の御書  
連敏法師

御書  
源道濟  
伊勢

古今言文 一の巻

関山  
逢坂山

~~~~~

~~~~~

七月朔日頃。~~~~~

~~~~~

~~~~~

平兼盛の女。~~~~~

~~~~~

尾~~~~~

~~~~~

~~~~~

白河の関  
磐城

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

藤原実方朝臣

小一條九大臣藤原師尹の孫。右近衛中将

まが昇進せし。故ありて陸奥守せり。長

徳四年任ふこと幸せり。

~~~~~

はるねちかきいしむらさきがけ  
一條院うせ給きて後、梅子の花のあけしやるを。  
後一條院をたもてはすしすこ。何心もさ  
らでとせ給くはまがたがしむるを  
あつらふ  
上東門院

後名ハ彰子。白堂関白道長の女にて。一條天  
皇の中宮とす。承保元年崩す。

いづれもよき花ぞもほのなほ  
心もきくぬなぞしむるを  
後朱雀院うせ給きて。上東門院白河

長岡寺  
山城

この院うせ給くは後内侍のまをいし  
つらふ  
藤原範永朝臣

康平の頃の人も

長岡寺にたもてはすしすこ。  
上東門院の中將  
あつらふ

古今和歌集 卷之六 廿四

住吉  
抄

延久元年二月。住吉まきりてかた

よ

民部卿經信

かたし風かきよるまきり

ねりしきりてまきりて

出雲にまきりて日くく

源 賴 實

日かきりてまきりて

かきりてまきりて

○金葉和歌集

崇徳天皇の天治年中。白河院の院宣によつて  
成る。源俊賴の撰も。八雲抄といはく。  
後拾遺金葉の頃より後まよの歌もかく平  
懐もる体もれど。ぬけいでいよとて。又  
もまよとて。喜名抄といはく。金葉集ハ又わ  
かきりてまきりて。輕くもる歌は  
かきりてまきりて。

古今讀本 上の巻

源雅兼朝臣

右大臣顯房の子にて權中納言たり。康治二年薨じ。

鶯のよびもよほもよひのこゝろ

こまじやいふもよひのこゝろ

水上落葉とよひのこゝろ

とよひのこゝろ

けしきもよほもよひの谷川乃り

新殿の夜がらにて。殊に薰風とよひのこゝろ

よめる。中納言雅定

後醍醐天皇の治時の人なり。

ちりちりぬるぬるのこゝろ

こゝろ

鳥羽殿にて人々歌つてつらつらとよひのこゝろ。

卯のこゝろの心をよめる。春宮大夫公實

堀河天皇の治時の人なり。

卯のこゝろ

水風暖かいとよひのこゝろ

こゝろ

源俊頼朝臣

小野山城



大納言経信の子にて。堀河白河鳥羽の三つ代り仕へて。本二頭。左京大夫。右近衛少将など。にちりたる人あり。家集を散木并歌集と云ふ。

よきうきうきはつちをばつちにしんまゝに  
くきくきくきくきくきくきくきくきく  
顯季卿の家にく九月十日入る申す  
いふに  
よきうきくきくきくきくきくきくきく  
よきうきくきくきくきくきくきくきく

月照古橋とくきくきくきくきくきくきく

三宮

法名ハ輔仁親王。後三條天皇の皇子也。

よきうきくきくきくきくきくきくきく

月ばつちのうきくきくきくきくきく

藤原基光

よきうきくきくきくきくきくきくきく

よきうきくきくきくきくきくきくきく

栞政左大臣の家にて。隣家紅葉とくきく

藤原仲実

よきうきくきくきくきくきくきくきく

もくもくもくもくのまはるるくもくもく

もくもくもくもくもくもくもくもくもく

落葉もくもくもくもくもくもくもくもく

谷川もくもくもくもくもくもくもくもく

もくもくもくもくもくもくもくもくもく

宇治の前は太政大臣の家のお合ふ。さくら

心もくもくもくもくもくもくもくもく

もくもくもくもくもくもくもくもくもく

もくもくもくもくもくもくもくもくもく

余古の浦  
木高見山  
逆江

○詞花和歌集

辺衛天皇の仁平年中。崇徳院の院宣に

よつて成る。藤原顯輔の撰とす。阿佛房

口傳よいとす。金葉詞花もくもくもくもく

もくもくもくもくもくもくもくもくもく

もくもくもくもくもくもくもくもくもく

んと。

堀河院の法時。百首の哥奉りける。春

まつ心をよめる

大藏卿匡房

中納言まゝの太宰権帥とく。大江氏を

たぎ。江帥とよぶ。天永二年薨す。江家

次第の撰あり。

白河の御所をたぎりて

白河の御所をたぎりて

白河の御所をたぎりて

俊頼朝臣

白河の御所をたぎりて

白河の御所をたぎりて

題き

能宣朝臣

白河の御所をたぎりて

白河の御所をたぎりて

源兼昌

源兼昌

皇后宮少進にて天永の頃の人なり。

白河の御所をたぎりて

白河の御所をたぎりて

題き

大江兼家

白河の御所をたぎりて

白河の御所をたぎりて

初瀬山  
大和

鷹狩きよめり

藤原長能

伊賀守にて。一條天皇の後時の人なり。

あはれきりしついでにのほろひのこころ

あはれきりしついでにのほろひのこころ

あはれきりしついでにのほろひのこころ

あはれきりしついでにのほろひのこころ

あはれきりしついでにのほろひのこころ

あはれきりしついでにのほろひのこころ

あはれきりしついでにのほろひのこころ

あはれきりしついでにのほろひのこころ

河内

三笠山 大和

琳賢法師

左京大夫顯輔。近江守ありける時。さうきこ  
ほりにまきつけるふだよりにつけていひつら  
はーらる

名ハ忠通。長寛二年薨じ。

關白前太政大臣

あはれきりしついでにのほろひのこころ

あはれきりしついでにのほろひのこころ

大江匡衡身まかりて又の年秋喜。あはれ

見こもあはれ

あはれきりしついでにのほろひのこころ

あはれきりしついでにのほろひのこころ

赤染瀧門

○千載和歌集

後鳥羽天皇の文治年中。後白河院の院宣

ふよりて成る。藤原の後成の撰ちり。

堀川院の時。百首ひかきまうける時。梅に

花のふらふらよめる。大納言師頼

いまよりを梅はらやむいこもせし

まじりてはらまふ人もあけけり

十首のふらふらよもせしるもたれたる

ふらふらよめりける。皇太后宮大夫俊成

元久元年薨ず。住所よりよりてま

五條の二位といふ。家集を長秋詠草

といふ。

みよのやのたのむらうらむらふらふら

越のきくわらふ風づらふら

落たふら路とらふらふらふら

赤染清門

ふらふらふらふらふらふらふら

あはれなきものよとて  
あはれなきものよとて  
あはれなきものよとて  
あはれなきものよとて

本ノ頭後頼の子らる。

あはれなきものよとて  
あはれなきものよとて  
あはれなきものよとて  
あはれなきものよとて

式子内親王

後白河天皇の皇女にて。加茂齋院  
にたまたま。

あはれなきものよとて  
あはれなきものよとて  
あはれなきものよとて  
あはれなきものよとて

あはれなきものよとて  
あはれなきものよとて  
あはれなきものよとて  
あはれなきものよとて

時鳥のよとて  
藤原清輔朝臣

左京大夫顯輔の子にて。太皇右宮大進たり。

治承元年卒す。袋草紙の作あり。

あはれなきものよとて  
あはれなきものよとて  
あはれなきものよとて  
あはれなきものよとて

あはれなきものよとて  
あはれなきものよとて  
あはれなきものよとて  
あはれなきものよとて

堀河院の時。百首のあはれなきものよとて。九月

雨のあはれなきものよとて  
藤原基俊

左清門佐らる。俊頼と同時代にあつて。互に  
歌道を競争せし人あり。

風越峯  
信濃

ふらふらとてのぼるるのぼるるのぼるる

卯の影さすさすさすさすさすさすさす

題——  
は印意園

大僧のまじりては曆を度まじりては。の禪を  
年殺す。まじりては。まじりては。まじりては。まじりては。  
慈心は。益する。家集を拾玉集といふ。

はらふらふらとてのぼるるのぼるるのぼるる

夏のかたさの目さすさすさすさすさす

和泉式部

はらふらふらとてのぼるるのぼるるのぼるる  
はらふらふらとてのぼるるのぼるるのぼるる

深草の里  
山城

人まじりてのぼるるのぼるるのぼるる

はらふらふらとてのぼるるのぼるるのぼるる

百首まじりてのぼるるのぼるるのぼるる

後成

夕きれが野さすのぼるるのぼるるのぼるる

うづらさすさすさすさすさすさすさす

題——  
後頼朝は

古今詩林 六の巻

ちよひていもむかひもたつてあやまらば

あやまらばいもむかひもたつてあやまらば

百首のうらよまふらふ時。さよふたのうらよま

よあつける

攝政前右大臣

名ハ兼実。承え元年薨す。

あまのこゝろをたのむにうらよまらば

鹿の喜はらそこのうらよまらば

権中納言俊忠の桂の家にて。秋上月といへる

うらよまらばあつける

俊頼朝臣

あまのこゝろをたのむにうらよまらば

聖後の谷川  
地江

いらちよむ。波うらよまらば

法性寺入道前太政大臣の家にて。洞底月夜

いらちよむ。波うらよまらば

あまのこゝろをたのむにうらよまらば

うらよまらばあつける

題

大貳三位

葛城山  
大和

紫式部の女にて。太宰大貳高階成章の妻なり。のち後一條天皇の乳母とちりて三位を賜ひ。狭衣の作あり。

あまのこゝろをたのむにうらよまらば



秋もねぎあみくろちうけり  
百首のあまきりける時よめる

待賢門院の堀河

鳥羽天皇の皇后待賢門院の官女ちり。

きりぬき下もかたはらに  
勢のまはつたまきりちうけり  
堀河院のはし。百首のあまきりける時。持夜  
のころちりける。後頼朝は  
松風のあまきりける。ちり  
らさうしちり玉川ひきさへ

持衣の玉川  
拾遺

同く時よめる 前中納言匡房

きりぬき下もかたはらに  
勢のまはつたまきりちうけり  
堀河院のはし。百首のあまきりける時。持夜  
のころちりける。後頼朝は  
松風のあまきりける。ちり  
らさうしちり玉川ひきさへ

大納言経信

承德元年豊ず。

都戸あふてこころがけはきりて  
あまきりける。ちりける。ちりける。  
あまきりける。ちりける。ちりける。

題昭法師

清輔朝臣の弟にて法師たり。

松浦島  
陸前

古今言林 卷之六

波留よりるえりしちぎらほりぬる

ゆらゆらにたぐらぐらに

有國大貳よちりてトマシキヤト

く

前大納言に任

て

乾永朝に

あつらひた月と海波のちぎらぬ

こよひもちりて逢坂乃舞

ゆらゆらにたぐらぐらに

時よめ

平康頼

大納言成頼の平家をとぼさし密謀  
興て。治承元年をわあはまき。成経後  
實と共了。鬼界島へ遠流せし  
人なり。

ふいふいしちぎらぬ

ちぎらぬ

薩摩がちぎらぬ

ちぎらぬ

園位法師の百首

古今言林 卷之六

旅のぶらりよめる 寂蓮法師

俊成の甥とて。在俗の時と権系定ととて。中務少輔とらし入らる。建仁三年寂す。

岩根ふとみねのきしを折まきわた  
くもさかぢかゆふくはゆのそ  
萬面の山寺に白くももて出でたる時  
月みちもふらふられがよめる

仁和寺後入道法親王覺性

鳥羽天皇の皇子とらる。

あはるもる有明ひ月のもくくびを

ひさしやゆら峰をいで  
寒夜月さらしるるをよめるける

園位法師

後に西行とらる。在俗の時と法友義清とと左兵衛尉とらし入らる。建久九年寂す。

あはるもる有明ひ月のもくくびを  
しるるもる有明ひ月のもくくびを  
眺望のこもるもる 園玄法師  
あはるもる有明ひ月のもくくびを  
あはるもる有明ひ月のもくくびを

高野 紀伊

高野にまうでくの時。山終にてよめり  
く  
仁和寺法親王守覺

後白河天皇の皇子なり。

あやだんそくちやまひのりた後ちのれや

岩さく苔るくもちよく

春ひくろく久我にまのれまけるついでり。

よもむの墓新やあしうやあめちけ

るまひく。む。ちまき。けける心けり

ちまき。けける心けり

権中納言通親

久我 山城

ちまき。けける心けり  
ちまき。けける心けり

○新古今和歌集

土御門天皇の元久年中。後鳥羽院の院宣より  
よつて成る。源通具。藤原有家。藤原定家。藤原  
家隆。藤原雅經。寂蓮法師等の撰なり。阿佛房  
口傳にいはく。新古今昔のやち。き姿にたむら

のさしむるをばあはれなる秋の露のさしむるを  
た遣えたるをばあはれなる玉露のさしむるを  
さしむるをばあはれなる玉露のさしむるを  
さしむるをばあはれなる玉露のさしむるを  
さしむるをばあはれなる玉露のさしむるを  
さしむるをばあはれなる玉露のさしむるを  
さしむるをばあはれなる玉露のさしむるを  
さしむるをばあはれなる玉露のさしむるを  
さしむるをばあはれなる玉露のさしむるを  
さしむるをばあはれなる玉露のさしむるを

春のはらけ歌

太上天皇

後鳥羽院より。

天の山  
大和

ほろろと春のさすに東にけし  
もよほのさすにけしたれびく  
百首のさすにけしたれびく

式子内親王

ほろろと春のさすにけしたれびく  
もよほのさすにけしたれびく  
百首のさすにけしたれびく  
後鳥羽天皇の後時のくまら。

左衛門督通支

三島江  
梅津

三島江の梅津の歌  
ついでに梅津の歌

藤原秀能

仁治元年卒す。

夕月夜ふみさししとをいぬ

かきつるの歌をいぬ

晩春さししをいぬ  
後徳大寺大信

名ハ藤原実定。建久二年薨す。

夕月夜ふみさししとをいぬ

かきつるの歌をいぬ

奈古の海  
越中  
又梅津

末の松山  
陸前

掾政太政大臣の家は百首歌合す。春曙といふ心をあけける  
藤原家隆朝臣

宮内卿たる。嘉禎三年薨す。家集を壬二

集といふ。

ついでに末の松山

梅津の歌をいぬ

題一  
西行法師

ついでに梅津の歌

梅津の歌をいぬ

守覚法師五十五首の歌

藤原定家朝臣

皇太后宮大夫俊成の子にて。權中納言たり。  
仁治二年薨す。詠ふ大概明月記ちどりの作あり。  
家集を拾遺愚草。拾遺員外といふ。

あはれなるそとにきこゆる  
あはれなるそとにきこゆる  
あはれなるそとにきこゆる  
あはれなるそとにきこゆる

大僧正行慶

白河天皇のほろも。

あはれなるそとにきこゆる  
あはれなるそとにきこゆる  
あはれなるそとにきこゆる  
あはれなるそとにきこゆる

あはれなるそとにきこゆる  
あはれなるそとにきこゆる  
あはれなるそとにきこゆる  
あはれなるそとにきこゆる

藤原雅經

刑部卿頼經の子にて。参議左兵衛督たり。

承久三年薨す。

あはれなるそとにきこゆる  
あはれなるそとにきこゆる  
あはれなるそとにきこゆる  
あはれなるそとにきこゆる  
あはれなるそとにきこゆる  
あはれなるそとにきこゆる  
あはれなるそとにきこゆる  
あはれなるそとにきこゆる  
あはれなるそとにきこゆる  
あはれなるそとにきこゆる

後成

又か思へくはむのほほむしき御

あはれむしき御あはれむしき御

はらむしき御あはれむしき御

能因法師

あはれむしき御あはれむしき御

あはれむしき御あはれむしき御

百首の御あはれむしき御

源具親

左兵衛佐にて。後鳥羽天皇の御時の御歌。

時あはれむしき御あはれむしき御

あはれむしき御あはれむしき御

閑路の御

宮内卿

後鳥羽院の御時の御歌。

あはれむしき御あはれむしき御

あはれむしき御あはれむしき御

百首の御あはれむしき御

二條院の御歌

源三位頼政の女にて。二條院の御時の御歌。

あはれむしき御あはれむしき御



~~~~~

最勝回天王と段の皇子に昔昔はひびく

太上天皇

~~~~~

~~~~~

~~~~~

名を良經建永元年薨す。家名は京極とよ

ふ。家集を且詩集といふ。

~~~~~

~~~~~

井手の玉川  
山城

百首の歌をよみし時 俊成

~~~~~

~~~~~

五十首の歌をよみし時 寂蓮法師

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

題 一 づ 二 づ

源頼光の女にて。相模守大江公資の妻なり。  
入道一品宮の官女とせらるるもあらず。

あかきよきまはるるまはるるまはるるまはるる

あかきよきまはるるまはるるまはるるまはるる

家隆朝臣

いづかきよきまはるるまはるるまはるるまはるる

あかきよきまはるるまはるるまはるるまはるる

掎政太政大臣の姪百首のあかきよきまはるる  
まはるるまはるる

寂蓮法師

うらひみたりあかきよきまはるるまはるるまはるる

あかきよきまはるるまはるるまはるるまはるる

題 一 づ 二 づ 西行法師

道のあかきよきまはるるまはるるまはるるまはるる

あかきよきまはるるまはるるまはるるまはるる

夏月まはるる 源三位頼政

兵庫頭仲正のふにて。右京大夫なり。治承四年  
宇治川の合戦にうちまぎれて自殺せり。

庭のあかきよきまはるるまはるるまはるるまはるる

あかきよきまはるるまはるるまはるるまはるる

伏見山  
山城

きたたの  
枕詞

百首のながまゝし時 俊成  
 ふ〜まのの踏ふ〜入〜  
 千五百番の歌合〜 具親  
 山洛秋行と〜をさ 慈園  
 見ば〜のゆ〜の

水無流ふて。十首の歌を〜し時

左清門督通光

権大納言たり。後鳥羽天皇の法時の人なり。

武蔵野やゆけ〜秋のは〜  
 題

頼政

〜の秋の月〜  
 八月十五夜和歌所の歌合〜。海邊秋月  
 鴨長明

松島  
陸前

鴨社の祢宜長継の子にて。後五位下に叙せられ  
後鳥羽上皇の和昇所に召されし。のち浮世を  
観下て出家せり。方丈記四季物語等の作あり。

松島やきふんもあまのむすひのこころは  
しなはもあまのむすひのこころは  
五十首の歌ありし時 掎政太政大臣  
あまのむすひのこころは  
まじりてあまのむすひのこころは  
雨後月 宮内卿  
月ささるるあまのむすひのこころは

あまのむすひのこころは  
百首の歌ありし時。秋の歌

惟明親王

高倉天皇の皇子あり。

あまのむすひのこころは

あまのむすひのこころは

題 中納言長方

建久二年薨す。梅小路の中納言と稱す。

飛鳥川せむしあまのむすひのこころは

あまのむすひのこころは

飛鳥川  
大和

及清涼院の時。ついでに大井川に  
て。紅梅水とて。名をいふ。

藤原資宗朝臣

代たよまて。いふ。同。いふ。いふ。

ら。いふ。いふ。いふ。いふ。

春日社の歌合に。首をいふ。いふ。

ま。いふ。いふ。いふ。いふ。

う。いふ。いふ。いふ。いふ。

ま。いふ。いふ。いふ。いふ。

五十首の首。いふ。いふ。いふ。いふ。

寂蓮法師

いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。

いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。

いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。

いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。

いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。

掎政太政大臣大納言に。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。

いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。

いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。

いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。

百首の歌。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。

崇徳院

鷹狩のついでに鷹狩り

鷹狩のついでに鷹狩り

鷹狩のついでに鷹狩り

左近衛中將之衛

鷹狩のついでに鷹狩り

鷹狩のついでに鷹狩り

鷹狩のついでに鷹狩り

名ハ藤原実房。元仁二年薨す。家三三條と云。

鷹狩のついでに鷹狩り

鷹狩のついでに鷹狩り

小式部内侍。御もたれたる。秋織りたる。唐衣  
をたれり。上東門院  
もたれたる。和泉式部

和泉式部

鷹狩のついでに鷹狩り

鷹狩のついでに鷹狩り

上東門院

鷹狩のついでに鷹狩り

鷹狩のついでに鷹狩り

鷹狩のついでに鷹狩り

暮年たしかに暮らしてゆく

俊成

ちかちかたるもよみかたをきかぬ風を

よみかたをきかぬもよみかたをきかぬ

五十首の歌をよみかた 歌隆朝臣

あぢたやみかたをきかぬもよみかた

よみかたをきかぬもよみかたをきかぬ

旅のよみかたをきかぬもよみかた

よみかたをきかぬもよみかたをきかぬ

たかたかたかたかたかたかたかたかた

雅經

白きよきよきよきよきよきよきよきよ

よきよきよきよきよきよきよきよきよ

雅經

僧山雅縁

ちかちかたるもよみかたをきかぬ風を

よみかたをきかぬもよみかたをきかぬ

東のよみかたをきかぬもよみかた

西行法師

ちかちかたるもよみかたをきかぬ風を

よみかたをきかぬもよみかたをきかぬ

小夜の中山 遠江

然野しんやすもすも時ときのしづの中なか

秀能

ちくぶのまはまのたつる秋あき風かぜ

さへさへ 峯みねの月つきがのこれる

題だいしづ 西行法師

よのひちのこころさへもよみかき

花はなちりもほさく人やまうし

任吉の歌合うたあひに山やまを 太上天皇

あつたのしづもさつたもあつた

道みちのしづもさつたもあつた

百首ひゃくしゅのしづもあつた

小侍こざむらい

小大進こおほしんの女をんなにて。後白河天皇ごしろくわてんの席せき時とき。太皇大

后宮ごきゆうの官女くわんぬたり。

密ひそつむやまのしづもあつた

あつたのしづもあつた

鴨社鴨止社の歌合うたあひとて人ひとのよあつた。月つき城しろ

長明

る川るがわやせみのしづもあつた

しづもあつた

石川の山城



古文讀本  
六の巻

古文讀本六の巻下終

明治三十二年五月二十日印刷  
明治三十二年五月廿四日發行

卷定價金三十五錢

選者 大和田建樹

發行兼  
印刷者 大橋新太郎

日本橋區本町三丁目八番地

版權  
所有

東京日本橋區本町三丁目

發兌元 博文館

